

ミステリ読書案内

2024. 11. 4 発行元

第614号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

最近出た本の中から

最近出版された本の中から四冊を取り上げてみることにする。この原稿を書いている9月上旬。文庫本は順調に出ている。単行本は発行点数、流通量ともに少ない印象。新刊書店の棚が寂しい感じだ。

南海トラフ地震への備え

南海トラフ地震臨時情報が出た後、期間内に大きな地震は起こらなかった。ひとまず良かった。ただ、「海水浴場を閉鎖したのは過剰反応だ」とか「ホテルのキャンセルが出た責任は誰が取るのか」等といった「臨時情報」への批判めいた声を発する一部の人達がいたのは残念だ。災害を最小限度に抑えるためには今後も「情報」が何度も出ることを「当たり前」と捕らえる必要がある。何事もやってみなければ反省は

生まれない。何度も試していく中で不備の点が表に出てきて改められていくことになる。30年以内に必ず起こることとして考え、行動していくことが大切。

南海トラフ地震については、海底各所に地震計、伸縮計、傾斜計…などの観測網が構築されているので、私としてはそのデータをもう少し知りたい気がする。調べればSNS上のどこかにデータが公表されているのかも知れないが、可能性の科学的な数値が世の中にもっと広まってほしいと思っている。

大崎梢「春休みに出会った探偵は」

3月に光文社から出た本。中学校三年生になる春休みからの話。語り手は安住花南子。父子家庭で、父親が海外出張になり曾祖母の五月の大家をしているアパートで暮らすことに。そこで巻き込まれる五つの事件を同級生の根尾と一緒に調べていく。その過程で調査所に務める今津と出会う…。

第一話の『きらきらを少し』はアパートを覗く怪しい男の話から。曾祖母は腰を痛めて入院に。アパートの過去に繋がる話を辿っていくと…。中学生の視点の話だが、いずれも大人の事情に突き当たる厳しい現実が目の前に…。離婚に絡むもの、相続に絡むもの。探偵との関りが謎として残されているので続編があるようだ。

碧野圭「菜の花食堂のささやかな事件簿 人参は微笑む」

8月にだいわ文庫から出た本。シリーズ六冊目。題名のとおり日常の「ささやかな」謎を考えるシリーズ。語り手は食堂を手伝う館林優希。探偵役は料理人で店長の下河辺靖子。今回は特にこじんまりした感じ。

第一話の『文旦とためらい』は、高知県で作られている文旦が菜の花食堂のメニューになぜ登場しないのかという謎。聞いてみると靖子先生はかつては文旦も食材として使っていたという。それが今使われなくなった理由は…。第二話の『筍の胸騒さわぎ』は、野菜納入を担当している保田さんの竹林から筍が一個二個盗まれる話。夜のうちにちょうど良さそうなものが消えるそう。その会話をしているところに、散歩している犬が動かなくなる話が持ち込まれてくる。靖子先生の判断は…。

富樫倫太郎「警視庁SM班IVキングベアー」

8月に角川文庫から出た本。シリーズ四作目。前作からの続きで、瀕死の重傷を負った殺し屋スリーパー(山田太郎)がなんとか生き延びて、再び犯罪組織「ルシファー」と「金星連合」との戦いセカンドステージに進む展開。「ルシファー」の会長・石原道寸が香港から新たな殺し屋「キングベアー」を雇い入れることで、次の段階に進む。今回は班長・薬寺松夫を始めとする六人の警視庁SM班のメンバーは脇役に追いやられ、スリーパーと彼を助ける石沢樹里亜の物語になっている。富樫作品の中では最もハードバイオレンスの性格が強いシリーズで、矢月秀作と似た雰囲気。スケールはずっと大きい…。

柳瀬みちる「神保町・喫茶ソウセキ 真実は黒カレーのスパイスに」 7月に宝島社文庫から出た本。前作は『神保町喫茶ソウセキ・文豪カレーの謎解きレシピ』。本書はシリーズ第二作となる。第一話～第四話と区切りがついているが、全部つながったストーリーである。話し手は喫茶ソウセキの店主・緒川千晴。そして名探偵の役はイケメン作家の葉山トモキ。「文学ミステリ」のテーマで。

SNS上で大辛シムロという人物が喫茶ソウセキへの誹謗中傷を発信し始めて千晴が騒ぎに巻き込まれていく場面からスタートする。第一話の部分は辛シムロとの争いが中心。関連している文学作品は太宰治の『正義と微笑』。第二話の部分は辛シムロが持ち込んできた林芙美子の『放浪記』の原稿の真贋判定。この辺りまでは話の方向性が見えず読んでいてもスッキリしないが、第三話、第四話になると谷崎という古書店主のところから出た品物に焦点があてられるようになり、40年前の人間関係だったり不思議な「黒カレー」を探る展開になっていき、だんぜん物語に面白味が加わってくる…。